## 第1卷最終回!

# 資本主義の止揚 個人的所有の 再建とは何か?

東京池袋 『資本論』を読む会

本源的蓄積は資本の生成の秘密 を明らかにしているが、同時に 資本主義的蓄積の歴史的傾向を も明らかにしているのだよ。



## 7月5日(土)午後6時から9時まで

豊島区西池袋第二区民集会室 豊島区西池袋3-8-20 (福祉ホームさくらんぼ併設)

【範囲】

第7篇 資本の蓄積過程

第24章 いわゆる本源的蓄積

第7節 資本主義的蓄積の歴史的傾向

前回、先に最終章の第25章を読みましたので、第24章の第7節に戻ります。したがって 第一巻の学習会は、次回で完了ということになります。

第7節「資本主義的蓄積の歴史的傾向」は第24章「いわゆる本源的蓄積」の最終節です。 本節は、ここまでの資本主義的蓄積と本源的蓄積の分析を踏まえ、資本主義的生産様式を歴史 的に位置づけ、資本主義を変革するとはどういうことなのか、といったことが、簡潔に記述さ れています。しかしこのような重要な内容にもかかわらず、簡単な記述のため、解釈が分かれ る余地があります。またソ連邦の解体もあり、「社会主義像」の見直しの動きがあり、その一 環として、この箇所が引用され、活発な論争が展開されたという経過があります。

マルクスは、資本の蓄積過程のメカニズムを究明し資本主義的生産の担い手である労働者階級の運命を明らかにしました。さらに、資本の起源と生成の過程を辿ってきたのですが、この考察を踏まえ、彼は生産形態の変化と所有形態の変化を結びつけて、過去・現在・未来を描き出しました。彼はテーゼのようなものを提出しているのですが、これを理解するためには、私的所有、個人的所有、社会的所有、共同所有(あるいは共同占有)といった様々な所有形態の区別と共通性をどう捉えるかが鍵になります。次回は分量が少ないので、丹念に読み進め、問題の核心に迫れたなら、と思います。最終回ですので、奮ってご参加下さい。

<裏面は前回学習会の報告です。参考にしてください。

### 【学習会報告6月7日実施】

第24章第6節の残り4分の1を読んだあと、第25章 (第一巻最終章)に入り、最後まで読みました。

## 第7篇 資本の蓄積過程 第24章 いわゆる本源的蓄積 第6節 産業資本家の生成(第19段落から)

第7節「産業資本家の生成」では、産業資本家の生成を促進した主要な契機が取り上げられています。前回は、これらの諸契機のうち、植民制度、国債制度と近代的租税制度を見ました。まだ未検討の契機が残っています。それは保護貿易制度と奴隷制度(児童労働と黒人奴隷労働)です。

#### 保護貿易制度

「保護貿易制度は、製造業者を製造し、独立労働者を収奪し、国民の生産手段と生活手段を資本化し、古風な生産様式から近代的生産様式への移行を強行的に短縮するための、人工的な手段だった。ヨーロッパ諸国は先を争ってこの発明の特許を取ろうとし、そしてひとたび利殖家に奉仕するようになってからは、間接には保護関税により、直接には輸出奨励金〔フランス語版には「国内の独占販売」も加わっている〕などによって、この目的のためにただ単に自国民からしぼり取っただけではなかった。属領ではあらゆる産業が暴力的に根こぎにされた。たとえば、アイルランドの羊毛工業がイングランドによってそうされたように。ヨーロッパ大陸ではコルベールの先例にならってこの過程はもっとずっと単純化された。産業家の本源的資本はここでは一部分は直接に国庫から流れ出てくる」(784-785頁)

保護貿易制度の記述はたったこれだけです。保護貿易制度の二本柱は保護関税と輸出奨励金です。これらは旧来の生産様式から資本主義的生産様式への移行期間を短縮する役割を果たしたとあります。保護貿易というと、フランス絶対主義時代の財務総監コルベールによる重商主義・重金主義的政策を思い浮かびますが、彼の政策は国家資金による産業育成策でした。

マルクスは、次章=第25章の注記(254)で、「保護貿易制度は後には国際競争戦での一時的な必要物になる。しかし、その動機はどうであろうと結果は同じことである」(793頁)と述べているように、保護貿易は時代状況によって果たす役割は違って来るのですが、本源的蓄積期に資本の形成に寄与する限りで積極的意義を持ったということができます。現在、アメリカ大統領・トランプによって行なわれている保護政策はそのようなものとして評価することはできません。

#### 児童と黒人奴隷の略奪的利用

「植民制度、国債、重税、保護貿易、商業戦争、等々、

これらの、本来のマニュファクチュア時代に生まれた若芽は、大工業の幼年期には巨大に成長する。大工業の誕生は、大仕掛けなヘロデ王的<u>児童略奪</u>によって祝福される。海軍と同じように、工場も〔児童の〕強制徴募によって新兵を補充する」(785頁)

機械制大工業における児童労働力・若年労働力の使用の 酷い実態は第13章「機械と大工業」で描かれました。本 節では、これら児童が教区教貧院や小屋住みの労働者家族 から略奪的に供給されたことが、イーデンやフィールデン によって暴露されています。

イギリスは奴隷貿易の特権をスペインから奪い取り、黒人奴隷の供給先を西インド諸島からスペイン領アメリカにまで広げました。リヴァプールは奴隷貿易の拠点となり、植民地に労働力を供給しただけでなく、膨大な資金をイギリスにもたらし産業資本の形成を促進しました。

「綿工業はイギリスには児童奴隷制をもちこんだが、それは同時に、合衆国の以前は多かれ少なかれ家長制的だった奴隷経済を商業的搾取制度に転化させるための原動力をも与えた。一般に、ヨーロッパでの賃金労働者の隠された奴隷制は、新世界での文句なしの奴隷制を脚台として必要としたのである」(787 頁)

マルクスは次のようにまとめています。

「資本主義的生産様式の『永久的自然法則』を解き放ち、労働者と労働諸条件との分離過程を完成し、一方の極では社会の生産手段と生活手段を資本に転化させ、反対の極では民衆を賃金労働者に、自由な『労働貧民』に、この近代史の作品に、転化させるということは、こんなにも骨の折れることだったのである。もしも貨幣は、オジエの言うように、『ほおに血のあざをつけてこの世に生まれてくる』のだとすれば、資本は、頭から爪先まで毛穴という毛穴から血と汚物をしたたらせながら生まれてくるのである」(787-788頁)

本章にはこのあと第7節「資本主義 的蓄積の歴史的傾向」があるのです が、これは後に回して、第25章に進 みました。



#### 第25章 近代植民理論

現行版(ドイツ語版)では、本章は本源的蓄積の章とは区別されているのですが、フランス語版では本源的蓄積論に組み込まれています。実際、本章は本源的蓄積論とは別物ではなく、それを補足する内容になっています。

近代植民理論とは、当時、ブルジョア経済学者によって 唱えられた植民地開拓理論ですが、それを代表したのがウェークフィールドでした。マルクスは、この理論を取り上 げ、検討を加えます。なぜなら、この理論のなかに「本源 的蓄積の秘密」が含まれているからでした。

標題に次のような注記があります。

「ここで問題にするのは、真の意味の植民地〔本当の植

民地 新日本出版社版訳〕、すなわち自由な移住者によって植民される処女地である。合衆国は、経済的に言えば、今なおヨーロッパの植民地である。そのほか、奴隷制度の廃止によって事情がまったく変わった古い栽培植民地もこの部類にはいる」(792頁)

植民地といっても一様ではありません。マルクスは、対象を「真の植民地〔本当の植民地〕」に絞っています。それは「自由な移住者によって植民される処女地」だと。

「真の」はドイツ語のwirklichです。第24章第6節に「本来の植民地」という言葉が出てくるのですが、そこでの「本来」はeigentlichです。マルクスは、両者を同じ意味で使っているのか、ハッキリしません。いずれにせよ、ここではヨーロッパからの移住者によって開拓されていった処女地(未開拓地地)で、かつ本国の属領となっている土地です。具体的には、北アメリカやオーストラリア・ニュージーランド等になります。アメリカ合衆国は「経済的に言えば、今なおヨーロッパの植民地である」とあります

が、独立したものの、当時はまだ経済的にはイギリスに従属していたからだと思われます。「栽培植民地」(西インド諸島等)も同類だというのは、奴隷制度が無くなっても、輸出基地として依然として本国に従属した存在であることには違いないからです。



前置きが長くなりました。これから本番です。

# 自己労働に基づく私的所有と資本主義的私的所有ブルジョア経済学はこの二種類の私的所有を混同した

「経済学は二つの非常に違う種類の私有を原理的に混同している。その一方は生産者自身の労働にもとづくものであり、他方は他人の労働の搾取にもとづくものである。後者は単に前者の正反対であるだけではなく、ただ前者の墳墓の上でのみ成長するものだということを、経済学は忘れているのである」(792頁)

私的所有には、自己労働に基づくものと、他人の労働の 搾取に基づくものがあります。後者は資本主義的私的所有 です。後者は前者の正反対であり、前者を打ち破って社会 の前面に躍り出ました。

「ヨーロッパの西部、経済学の生まれた国では、本源的蓄積の過程は多かれ少なかれすでに終わっている。そこでは、資本主義的支配体制は、国民的生産全体をすでに直接に自分に従属させているか、または、事情がまだそこまで発展していないところでは、この体制のかたわらに存続してはいるがしだいに衰退してゆく社会層、時代遅れの生産様式に付属している社会層を、少なくとも間接には、支配している。この完成した資本の世界に、経済学者は、事実が彼のイデオロギーを非難する声が高くなればなるほど、ますますやっきになり夢中になって前資本主義世界の法律観念や所有観念を適用するのである」(同前)

西ヨーロッパは、すでに資本主義的生産が社会全体を覆

うようになっていて、この生産様式の労働者搾取の過酷な 実態が誰の目にも明らかになるようになると、ブルジョア 的経済学者たちは、それを覆い隠すことに腐心するように なります。彼らは、旧来の法律観念や所有観念を持ち出す ことによってこれを行ないました。「自己労働に基づく私 的所有」なる観念もその一つです。彼らは、資本主義社会 の所有の在り方は決して他人の労働の搾取を前提とするも のではない、と言うのです。

#### 経済学者は植民地での二つの生産様式の対立を語る

しかし植民地では事情が異なります。

「資本主義的支配体制は、そこではいたるところで、自分自身の労働条件の所有者として、自分の労働により、資本家をではなく、自分自身を富ませている生産者の障害にぶつかる。植民地ではこの二つの正反対の経済制度の矛盾が、ここでは両者の闘争のなかで実際に確認される。資本家が背後に本国の権力をもっているところでは、彼は、自己労働にもとづく生産様式および取得様式を暴力によって一掃しようとする」(792-793 頁。この部分は新日本出版の訳を採用)

資本主義的支配体制は、植民地では「自己労働にもとづく生産様式」によって妨害される、とあります。植民地には自分の労働によって自らを富ませる条件があるので、資本主義的生産様式を植え付けようとしても跳ね返されます。資本は、暴力的に自己労働に基づく生産様式すなわち小生産様式を暴力的に一掃する必要に迫られます。経済学者たちの植民地に対する態度はどうなるでしょうか?

「資本の追従者である経済学者に、本国では資本主義的生産様式を理論的にそれ自身の反対物として説明する任務を負わせる利害関係、その同じ利害関係が、植民地では彼をそそのかして『事情を打ち明け』させ、二つの生産様式の対立を声高く宣言させるのである。この目的のために、彼は、労働の社会的生産力の発展や協業や分業や機械の大規模応用などは労働者たちの収奪とそれに対応する彼らの生産手段の資本への転化なしには不可能だということを指摘する。いわゆる国富のために、彼は人民の貧困をつくりだす人工的手段を探求する。彼の弁護論的甲冑は、植民地ではぼろぼろになった火口《ほぐち》のように次々にこわれてゆくのである」(793頁)

分かりにくい文章ですが、こういうことです。経済学者 たちは、母国では労働者に敵対的な資本主義的生産様式を あたかもその反対物であるかに言いくるめるのですが、植 民地ではそれとは反対に、二つの生産様式の違いを遠慮な く語るというのです。ご都合主義ですが、態度は違ってい ても、どちらもブルジョア的立場からのものだという点で は共通しています。

#### ウェークフィールドの組織的植民論 ---彼は資本関係の成立条件を発見した

ここでイギリスの経済学者ウェークフィールドが登場

し、彼の組織的植民論に検討が加えられます。彼は、イギリス本国のためにあれこれの植民政策を提言した人物として有名ですが、マルクスは、彼の唯一の理論的"功績"を次の点にあると述べています。

「E・G・ウェークフィールドの大きな功績、それは、 植民地についてなにか新しいことを発見したということではなく、植民地で本国の資本主義的諸関係についての真理を発見したということである。その本源〔そのはじめ〕での保護貿易制度が本国での資本家の製造に努めたように、一時はイギリスが法律によって実行しようとまでしたウェークフィールドの植民理論は、植民地での賃金労働者の製造に努めるのである。これを彼は"systematic colonization"(組織的植民)と呼んでいる」(793 頁)

彼の理論は「植民地での賃金労働者の製造」の目論みな のですが、そのなかには本源的蓄積の秘密が含まれている というのです。具体的に見ましょう。

「ウェークフィールドが植民地でまず第一に発見したことは、ある人が貨幣や生活手段や機械その他の生産手段を所有していても、もしその補足物である賃金労働者、すなわち自分自身を自発的に売ることを余儀なくされている別の人間がいなければ、この所有はまだその人に資本家の極印を押すものではない、ということである。彼が発見したのは、資本は物ではなくて、物によって媒介された人と人とのあいだの社会的関係だということである」(793頁)

マルクスは、彼の発見をよりよく理解するために前置きをしています。

「生産手段も生活手段も、直接的生産者の所有物としては、資本ではない。それが資本になるのは、ただ、それが同時に労働者の搾取・支配手段としても役だつような諸条件があるときだけである。ところが、生産手段や生活手段のこのような資本主義的なたましいは、経済学者の頭のなかではそれらの素材的実体と非常に緊密に結合されているので、彼はそれらのものを、どんな事情のもとでも、それらが資本の正反対物である場合にさえも、資本と名づけるのである。ウェークフィールドの場合もそうである。さらに、多くの互いに独立な自営労働者の個人的所有物としての生産手段の分散を、彼は資本の均分と呼んでいる」(794頁)

ウェークフィールドは、小経営のもとでの生産手段も間違って資本と呼んでいるのですが、ともあれ、「くもしも資本が社会の全成員のあいだに均等に分配されるとすれば、だれも自分の手で使えるよりも多くの資本を蓄積することには関心をもたないであろう。これは、ある程度までは、新しいアメリカの植民地の状態なのであって、そこでは土

地所有への熱情が賃金労働者階級の 存在を妨げているのである〉(『イギリスとアメリカ』)」と述べ、資本主義的関係の成立の条件を言い当てています。

「つまり、労働者が自分自身で蓄 積することができるあいだは、そし



て彼は自分の生産手段の所有者であるかぎりそれができるのであるが、それができるあいだは資本主義的蓄積も資本主義的生産様式も不可能なのである。そのためになくてはならない賃金労働者階級が〔植民地には〕ないわけである」(794頁)。

それならば、「古いヨーロッパでは労働者からの労働条件の収奪、したがってまた資本と賃労働とは、どのようにして生みだされた」(同前)のかということになるのですが、この点については、彼はまったく的外れな「独特な種類の社会契約」を持ち出します。

「〈人類は……資本の蓄積を促進するための簡単な方法を採用した〉が、もちろんそれはアダムの時代から人類の存在の最終唯一の目的として人類の念頭に浮かんでいたものである。〈人類は資本の所有者と労働の所有者とに分かれた。……この分割は自由意志による了解と結合との結果だった〉」(795頁)と。

資本と賃労働との関係は人々の「自由意志による了解と結合の結果」だった、つまり「一口に言えば、『資本の蓄積』の栄光のために人類大衆は自分自身を収奪した」(同前)と言うのです。

「そこで人々は思うであろう、この自己放棄的狂言の本能は、ことに植民地では奔放になるにちがいない、なぜならば、社会契約を夢の国から現実の国に移すことができるような人間と環境とはただ植民地だけに存在するのだから、と」(同前)

資本賃労働関係は人々の自由意志にもとづく契約によって生まれたのだったら、植民地では自然発生的に産み出されるはずです。「だが、それならば、自然発生的な植民とは反対の『組織的植民』はいったいなんのためのものなのか?」(同前)と。

#### 自由な植民地は資本の移植を妨げた

「すでに見たように、民衆からの土地の収奪は資本主義的生産様式の基礎をなしている。これとは反対に、自由な植民地の本質は、広大な土地がまだ民衆の所有であり、したがって移住者はだれでもその一部分を自分の私有地にし個人的生産手段にすることができ、しかもそうすることによってあとからくる移住者が同じようにすることを妨げないという点にある。これが植民地の繁栄の秘密でもあれば、その癌腫―資本の移住にたいするその抵抗―の秘密でもあるのである」(795-796頁)

「植民地では労働条件とその根源である土地からの労働者の分離がまだ存在しないか、また存在してもただ散在的にかまたは非常に局限された範囲でしか存在しないのだから、工業からの農業の分離も農村家内工業の絶滅もまだ存在しないのであって、それならば、資本のための国内市場はいったいどこから生まれてくるのだろうか?」(796頁)

ウェークフィールドが植民地に見た現実は、このようなものでした。

資本主義的生産が発展すると、賃金労働者は絶えず再生

産されるだけでなく、相対的過剰人口も産み出されます。 その圧力によって労働の需要供給の法則は賃金を抑える方 向に働きます。それは労働者の資本に対する社会的従属を 保証しました。ところが植民地では、労働力が本国から供 給されても労働市場はつねに供給不足のため、労働の需要 供給の法則は破られてしまいます。今日の賃金労働者は、 明日は独立自営の農民か手工業者になってしまうからで す。すると賃金労働者は資本家への従属関係といっしょに 従属感情もなくしてしまいます。

ウェークフィールドとその弟子のメリヴェールは、自由な植民地で、そこに移った労働者がすぐに独立自営の農民や手工業者になってしまうのは、土地が安価なため容易に入手できることに原因があると考えました。

#### 組織的植民論は労働者の資本への従属を人工的に作り 出そうというものであった

「ウェークフィールドに言わせれば、植民地におけるこのような弊害の結果はなになのだろうか? それは生産者と国民財産との『分散の野蛮な制度』である。無数の自営的所有者のあいだへの生産手段の分散は、資本の集中を破壊するとともに結合労働のすべての基礎を破壊してしまう。長い年月にわたっていて固定資本の投下を必要とする長期の企業は、すべて実行上の障害にぶつかる」(798-799百)

「〈われわれの資本は、完成までにかなりの期間が必要な多くの作業のために用意されてあった。だが、われわれは、すぐにもわれわれに背を向けるだろうということがわかっている労働者たちを使ってこのような作業を始めることができたであろうか? もしこのような移住者たちの労働を確保しておけるということが確かだったならば、われわれは喜んですぐに彼らを高い値段で雇い入れたであろう。いや、たとえ彼らがいなくなるということが確かだったとしても、もしわれわれの必要に応じて新しい供給があるということが確かだったならば、やはりわれわれは彼らを雇ったであろう〉(『イギリスとアメリカ』)」

こうして彼は、労働者の小生産者への逆戻りを阻止する ための人工的な手段を思いつき、それを提言したというわ けです。それは一体どういうものなのか?

「では、植民地の反資本主義的な癌腫はどうすればなおるだろうか? もしすべての土地を一挙に国民的所有から私有に転化させようとするならば、それは、たしかに悪弊の根源を絶やすことになるであろうが、しかしまた――それは植民地をも滅ぼしてしまうであろう。一石二鳥、それがわざというものである。かりに、政府の力で処女地に需要供給の法則にはかかわりのない価格をつけ、この人為的な価格のために、移住者は土地を買って独立農民になれるだけの貨幣をかせぐまでには今よりももっと長く賃労働をしなければならなくなるとしよう。他方、政府は、賃金労働者にとって相対的に禁止的な価格で地所を売却することから生ずる財源、つまり神聖な需要供給の法則の侵害によ

って労賃からしぼり取られるこの貨幣財源を、それが大きくなるのと同じ割合でヨーロッパから植民地に貧民を輸入して資本家さまのために彼の賃労働市場をいっぱいにしておくために、利用するとしよう。こういう事情のもとでは、最善の世界では万事が最善の状態にあるということになるであろう。これが『組織的植民』の大きな秘密なのである」(799-800頁)

ウェークフィールドの提言は、植民地に移った労働者が 簡単に独立自営農民になれないよう、人工的に土地価格を 高く設定するというものです。彼は次のように述べます。

「〈この案によれば、労働の供給は恒常的で規則的になるにちがいない。なぜかといえば、第一には、労働者は労働して貨幣をかせいでからでなければ土地を手に入れることができないのだから、すべての来任労働者は、賃金を得るために結合労働することによって、自分たちの雇い主のために、より多くの労働を充用するための資本を生産してやるだろうからである。第二には、賃労働をやめて土地所有者になろうとする人は、だれでも、まさに土地を買い入れること自体によって、新たな労働を植民地に誘致するための財源を保証することになるだろうからである〉」(800頁)

「労働者は、まず資本家さまのためにもっと多くの労働者を搾取することができるように『資本』をつくってやっておいて、それから労働市場に自分の『身代わり』を立てなければならない。そして、この身代わりを、政府は、この労働者の費用で〔高く売りつけた土地代金を基金にして〕それまで彼の主人だった資本家のために海の向こうから送ってよこすのである」(800-801 頁)

ウェークフィールドの植民政策はイギリス政府によって 実行に移されましたが、失敗に帰しました。西ヨーロッパ と合衆国における資本主義的生産の進展は彼の処方を不要 なものとしてしまったからです {オーストラリアもしかり です)。

最後にマルクスは、本章の最終段落を簡潔な文章でまとめています。そのまま引用します。

「とはいえ、われわれはここでは植民地の状態にかかずらっているのではない。ただ一つわれわれの関心をひくものは、新しい世界で古い世界の経済学によって発見されて声高く告げ知らされたあの秘密、すなわち、<u>資本主義的生産・蓄積様式は、したがってまた資本主義的私有は、自分の労働にもとづく私有の絶滅、すなわち労働者の収奪を条件とするということである」(802 頁)</u>

以上です。

(雅)

\*次回は7月5日(土)。第2 4章第7節「資本主義的蓄積 の歴史的傾向」をやります。 会場は、西池袋第二区民集会 室になります。

